

ど、今では考えられないような長閑な学習プログラムは忘れられないものばかりで、思い出に残るエピソードも数多くありました。中でも「ラブレターの書き方」で学んだ学級生100人が、折角学んだことを何かに活かそうと、それぞれ原稿用紙3枚に想いを書き、第14回NHK青年の主張に応募しました。1つの町から100人もの応募があったのは青年の主張史上初めてとあって話題となり、ラジオ番組で全国に紹介されましたが、何故か私の原稿だけが事前原稿審査をパスし発表に臨みました。発表までの10日間、学校から借りたオープンリールのテープレコーダーで練習し、万全を期したものの、発表の当日持って行くはずの原稿を自宅トイレの中に置き忘れるという大失態を演じ、パニックとなりましたが、開き直ったアドリブな「私の訴えたいこと」と題した発表が良かったのか、見事愛媛県代表に選ばれ、ある意味脚光を浴び、後の自分の人生を変える大きなきっかけとなりました。

当時青年団と婦人会は町の中心的二大社会活動団体で、とりわけ青年団はション・ション青年団と言われるように、ディスカッションやレクリエーションを積極的に行っていました。町議会議員の選挙が近づくと、公職選挙法では禁止されているものの、嫌がったり渋る立候補予定者全員を集め、個人演説会を連続して開いて意見を聞いたり、町のあちこちに花や木の植栽をするなど、今でいう地域づくりを行い、また町内各地で盆踊り大会、ダンスパーティー、文化祭、町民運動会など文化・スポーツにも目を向け、まちをけん引し続けました。請われるまま双海町連合青年団長、伊予郡連合青年団長、愛媛県青年団連合会長、愛媛県青少年団体連絡協議会長、四国四県青年団連絡協議会長としてエリアを東ね、特に愛媛県青年団連合会長として県内に約1万人もいた団員の活動の領域を広げて地域づくりに積極的に関わりました。

私は青年団時代に、大きく分けると①仲間、②主張、③ふるさと、④感動、⑤学習、⑥夢という

6つの大切な道具を手に入れたように思います。「人は人によりて人となる」と言いますが、その時々いい人に出会い導いてもらうことができました。今も内気口下手のそしりを免れない成長過程の主張でしたが、何とか人様の前で思っていることが言えるようになったことは嬉しい限りです。

ふるさとへの思いは人一倍強く、今も自分の一番のよりどころとなっています。「感動は感動という作用によってのみ点火する」と言われますが、感じて動く感動がなければ相手の心を動かすことはできないのです。学歴はないが学習歴はある、ゆえに高卒でも後に地元大学の教壇に立って17年間も理論でなく論理を語り続けることができました。また「30歳になったらアメリカに行きたい」という23歳の時に生活設計に書き込んだ夢実現のために努力し、「昭和の咸臨丸」と銘打った第10回総理府派遣第10回青年の船の班長に選ばれ、建国200年のアメリカやメキシコ、ハワイを約2ヶ月にわたって歴訪し、世界地図の真ん中に日本のない世界地図を見ることができ、人生観を変えることができたのですから驚きです。青年団に入団してから既に60年が経ちましたが、この6つの道具は今も変わらず私の大切な道具として使っており、道具は研がないと錆びて使えなくなるので、常に砥石となるべき研鑽の場を求め、向上心を忘れず努力をしています。

3 病気と転職

そんな私を25歳の時、病魔が襲いました。漁師の朝は早く仕事は重労働でした。漁を終え帰宅するとすぐさま風呂に入って着替え、慌ただしく青年団活動に参加しました。青年団活動は飲酒を伴っており、白熱した議論は深夜にまで及び、自分の気付かない間に疲労が蓄積していたのか、ある日自宅で倒れ意識不明となりました。救急車でない時代ゆえ、また松山の病院も遠くてまもなく、とりあえず地元のタクシーで松山市内の病院へ運ばれ、意識は回復したものの3ヶ月の入院を余儀なくされました。